東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十七卷第二號

統制經濟の運營……高田保馬
支那銀行業の整備課題……德永清行
ペッティの經濟理論……白杉庄一郎
支那財政改革運動の起點……柏井象雄
明治初年に於ける日本經濟への內省……堀江保藏
合衆國海運委員會「アメリカ海運の經濟的調査」……佐波宣平
彙報

昭和十八年八月發行

明治初年に於ける日本經濟への內省

堀江保藏

一

明治初年の强烈な殖產興業政策は、いふ迄もなく歐米資本主義勢力に對抗するに足るべき我國經濟力の急速なる充實を目標としたものであるが、同時にそれは我國が經濟の發達に於て歐米諸國に對し著しく後れてゐるといふ事實の內省に基いて行はれたものであることも勿論である。かゝる內省は、苟も直接・間接に歐米の實狀に觸れた人士の胸中に胚胎したところであつて、既に幕末に於ても佐久間象山・神田孝平・福澤諭吉等は、或は書簡・上書に、或は著書に、その內省を吐露してゐる。併し乍ら明治初年、殖產興業政策が本格的に始まる迄に、この內省に最も大きな機會を與へたものは、明治四年十一月より六年九月に亙つて行はれた特命全權大使岩倉具視一行の米歐巡回であらう。

一行に加はれる故久米邦武博士の筆に成るその巡回記が「特命全權大使米歐回覽實記」と題して明治十一年に上梓せられ、今日貴重な史料となつてゐることは周知のところであるが、上述の意味に於ける內省が本書に如何樣に示されてゐるか、以下二三の點について紹介しようと思ふ。本書を繙けば、全五編五冊の開卷より冊尾に至るまで、一言半句と雖も內省の表現たらざるはなしと稱するも過言ではない。併し一々列擧するは煩に堪へざるところであり、また無意味に墮する恐れあるを以て、其後具體化せられた殖產興業政策との關聯に於て重要なりと思惟する二、三の點を摘記するに止める。

二

イ　國民の富について

德本財末の思想の下に永い間生活を續けて來た日本人の眼に、歐米諸國が政府人民共に財を重んじ、以て富强を致せる狀態が如何に映じたか。これは本書の至るところに散見するが、試みにその一ケ所を抽記するに左の如くである。

『抑人民の公選にて議員を出し立法の權を執るは、歐洲一般

の通法にして、政治の最も支那・日本に異る所なり。此法の行はれしは羅馬時代より遙觴し、時代により變化したれども、畢竟貿易を重んじ會社協同の風俗より生ぜる所なり。支那・日本の人民は、原來農耕自活の風儀にて、修身を政治の主義とし、財產を重んぜざるにより、立法上にて肝目の主義を缺たれば、民權いかん、物權いかんに於ては殆ど馬耳風なるのみならず、反て其權を抑壓して、變風移俗の良模とするものゝ如し。故に政治國安の論は、常に財產上に於て注意をなさず、君子小人判然として別界をなすにより、漸々に貧弱に陷るを致せり。東西洋の隔りに因て民の習慣を異にせるは、政治の樣子も異なるべきこそ至當なれども、方今世界舟楫相通じ貿易交際の世となりては、國權を全くし國益を保つには、國民上下一和して、第一に財產を重んじ富强を致すに注意を厚くせざるべからず。立法の權は此より生ずるなり』(第二編七三―四頁)

米國に於ける支那人勞働者排斥問題や南北戰爭に關說せる個所に於ても『西洋の一令一法みな人民の財產生理を審査し、其保護の要旨を失はざるを主とするにより、情理明白なることも容易に決行するに至らず。是其能富强を保つ所なり』(第一編、八九頁)と述べて、一國富强のために人民の財產を重んずべきことを力說してゐる。財を重んじ國富を旺んならしむる具體的內容は、農工商を振起するにある。先づ歐米の農業が全權一行の眼に如何に映じたか。

■ 農業について 『歐洲人、東洋諸國を評し農國といふは、農に巧なるに非ず、農業の一途のみやゝ開けたるなり。猶匈加利國を評して歐洲の農野と謂ふと同じ。歐洲厚生の道に於て術を盡すは、啻に工商のみにあらず、(中略)歐洲の農業を務めること年々精に入る如此し』(第三編、一一三―四頁)とは、最も切實な內省の表現として受取られるが、更に在來の日本農業の不振の原因を糺して次の如く述べてゐる。

『土地を耕種し化形品の收穫をなすは、固より穀物に止らざること今にして而後に知らざれども、日本の風俗は只穀のみを重んじ、國の貧富も穀を收量する多寡にて較するに至る。是工商未だ興らず、生意の未開なるに因るなり。穀物は人民一般の生活を保續するに切要なる食用品なれば、歐洲にても之を耕稼するを怠るにはあらず、又貿易上に於ても穀の需用は甚だ莫大なること明瞭なれども、地利を盡すの目的に於ても、必も穀を耕すには止らず、只最も利多きものを耕すにあり。故に農產の種類は一にして足らず』(第五編、一九二―三

頁）

いふ心は、農業の商業化に於て我國が頗る後れてゐることを指摘せるものゝ如くであるが、この點は米國の勸農寮を視察せる際にも一行の注意に上つたところであつて、そこには『農事を勸奬するには理上と實驗と互に備り、天時地宜に應じ播種より收穫に至るまで長き月日を經過する際に、種々の變化を歷試し、已に收納の後に、運搬して市場に價を得て、需要の人に供給を遂ぐを以て其終功とす』（第一編二四二頁）と書かれてゐる。

右の勸農寮（Agricultural Hall）の事業、米歐に於ける科學的農法の發達、勸農會社（產業組合の事か）の普及、農業博覽會の開設など、興農施設に言及せるところ多きより察すれば、農業國と稱しながら農業の未だ近代化せざる我國の狀態が、一行の腦裏に如何に映じたかは、いはずして明かであらう。

八　工業について　一行が各種工場を視察見學して、機械的生產樣式の興隆に眼を瞠つたことはいふ迄もないが、その結論として到達せるところは凡そ次の三點であつた。一、機械的生產の基礎として製鐵業を重んずべきこと、二、美術工藝よりも大量的生活必需品工業に重點を置くべきこと、三、工業蔑視の思想を排除すべきこと、これである。

先づ第一の點については、例へば

『農牧の業のみにて國の生意を證し難し。如何となれば南蠻も耕し食ふをしる、北狄も牧し居るを知る。生て食し、食して死す、榛々狉々域中のみ。其開智なるに及べば、利用以て厚生の道を盛んにし、礦業興り製作巧みなり。（中略）礦業興らざる時代を目睹せば、憐むべきの生意ならん。進で銅礦を採り金銀に及ぶ。三品金の貴重せらるまでは、是を金の時代と謂て中世に比す。銅質は軟にして器械に適せず、必ず堅剛の鐵を化冶するを知て、始めて利用の緒につきたりと謂べし。鐵礦の國民に貴重せらるを鐵の時代と謂、米歐諸國は方に此時代にすゝめり。（日本は鐵を用ふれども未だ化冶の術に達せず、其利甚だ微なれば未だ此時代に進まずとす）鐵冶の業盛んなれば、百礦みな興り製作精美にして、其利を農牧に及ぼす』（第一編、二七—二八頁）

と述べ、或は『西洋各國にて製鐵の業盛なるを以て大小の器械みな購買ふに易く修造に便なれば、尋常の

鋤・犂・鍬・鎌の如きは形式百出して各所長あり、水の器械・齒輪・助力の器の如き、民家往々に常用となして怪まず。（中略）一般に利用厚生の具、如此く流布して、其間に新奇の發明を生じ、猛力巨大の械具をなす。（中略）之を要するに、厚生は利用による、製鐵の業を興して百械を利するは、實に政事の急務なり』（第四編、五一―五二頁）といひ、更に『抑鋼鐵の諸器は百工の本資にして、工の其事を善せんとす、必ず先づ其器を利す』（第五編、一三頁）、或は『歐洲の工藝に秀でたるは、元來其器械の利なるによる、利器を製するは鐵冶の業を盛大にするにあり』（同、三七頁）と說いてゐる。

機械生產の發達は大量的生活必需品工業の發達を意味する。かくて一行は上述の第二點、卽ち日本を含む東洋に於ては、工業に於ける重點が美術工藝に置かれてゐることに反省を加へた。曰く『夫礦業を語れば金銀に注目し、工業を語れば精品に挂念するは東洋人民の慣習にて、濟世の眞理を遺忘したるなり。古人も謂はずや、先王之於民阜其財求而利其器用と。工業の尙ぶべきは、元來國民の生活を便安にし、營業力を增さしむるによる』（第五編、二二八頁）と。更に工業と工藝との輕重並に關係について左の如く述べてゐる。

『工業の產物、人民の阜財利用をなす、目的を上達するに從ひ、工の巧拙は人の嗜好に深淺を生ずること自然の理なり。されば家產高等に位せる人は、上好品を競求する度を進めて工藝美術の學も從て進步す。是は工業にて奢靡を勸むるにあらず。蓋し人民の勉勵を進めて富燿の榮を工業に顯したるなり。東洋人やゝもすれば、人民必用品の工業を奬足にすることを遺漏し、直に美術の工を以て工業の目的となすは甚だ本末を失へり。故に東洋にて名譽の工產物を擧れば、紡織に於て絹帛、器皿に於て陶、銅・漆の美品、其他刺繡・彫鏤の工に富みたれども、器械・器用凡そ一般に需用する工產はみな盛ならず。西洋は之に反し、工業盛大なれども、手技の巧妙風致と其術の敏捷奇なることは東洋に及ぶ能はず。佛・以兩國最も手技に長ず。佛のゴブラン織、以の石彫・淸畫は歐洲に珍賞せられたれども、國の利益となるものにあらず』（同二三四―五頁）

卽ち工業興れば工藝亦盛んとなるべきも、工藝に長ずるのみにては毫も國富を興すに足らざることを說い

て、日本在來の工業に内省を加へてゐるのである。

かくの如く東洋に於て、所謂工業の發達を見なかつたのは、一行によれば、國富の源泉として農耕が專ら重要視せられ、一時、工業が蔑視せられたからであつた。曰く

『東洋の俗は古より道德政治を主とすれども、厚生利用して正德を以て之を幅飾するは三代政治の本領なり。當時に遡り之を夷考するに、鋳冶の業も夙に興れり、金鑄して鼎鑊を造り、槌鍛して斧鋸鎩鍬を造り、刀刃針釘を作る、四口の家も鋳なければ生活頓に困す。其利已に著し。然るに中世より退歩に屬したるは、蓋し他の故にあらず。工藝の業を奢靡の淫巧と誤認し、元來工は民用を足し國の營業力を增す必要の職なるを知らず、只人力のみ是疲らし、物力を借るに怠りしに因るなり』(第三編、二〇九—二一〇頁)

と。工業を蔑視したる結果機械の利用に後れたことが端的に指摘されてゐるといふべきであらう。

二　商業について

先きに、一行が農業の商業化について考へたことを述べたが、農・工を問はずその發達に市場なる條件の缺くべからざることが次の如く說かれてゐる。曰く『米歐の民は貿易を以て最要の務めとす、是東洋の人の目して商國と謂ふ所なり。然ども其民大半は農に從事し少半は工に從事す。商は百人中に五六人にすぎず。惟農たり工たるものまで熱心に物産の裕通に注意し、都會の地は協同して商旅商船を其地に輻湊せしめんことを希ふは、東洋農國の夢にも想像し及ばざる所なり』(第一編、七二頁)と。

商業と稱するも、一行が最も着目したのが外國貿易であつたことは右の引用文によつても知られるが、この事は更に次の如く說かれてゐる。曰く『夫金銀も亦物産の一のみ。其價格によりて其適當の物品に換るときは、無用の金銀は彼の手に落ち、有用の物品は此手に入る。物品の價は大增あるも、貨幣の價は小變にすぎず。貿易の注目すべきは此にあり』(第一編、三四一頁)と。これは貨幣の媒介によつて財貨を價値なき所より價値ある所へ移轉し、以て國富を增進すべきものが貿易であることを說いたものであるが、この道理が國内商業にも適用さるべきはいふ迄もないところであつて、一行は江戸時代以前の商業・貿易の不振が國富の

増進を阻止したことをも認めて居り、更に明治初年の正貨流出に關說して『上下只謂ふ、金銀は至寶なりと。他の物產不融通に因て國の富を失ふ年に幾千萬圓なるを知らざれども、曾て憂ふことなく、僅々の貨幣外國に輸出すれば、頭を衆め痛恨するに至る』(同、三四一頁)と評してゐる。

如上の意味に於て國富に至大の關係ある外國貿易の振興が、農・工業の發達と密接離るべからざる關係にあることはいふ迄もないが、これと共に信用の重んずべきことについて『貿易の道に於て名譽の所謂愛顧信用をいふ貴きこと萬金の資本にも敵し難し。良賈は此名譽を年々に增大にすることを務む、其眼前の小利をすて顧みざるは、贏を此資本に積めばなり。拙商は反て名譽をすて小利を攫取す。數年間にて較すれば優劣なきに似たれども、永年の後に貧富天淵に至るは比々みな然り』と說き、續いて我國を顧みて左の如く述べてゐる。

『我日本國近年始て外國に交る。從來の國產米歐人に珍異せらるゝものは、指を屈するに勝へざるほどなれども、輸出の利未だ生ぜざるは三の原由による。一は輸送高小量にて、彼地製造の需用に不足なるによる。二は輸送繼續せず、彼地の市場に價格を有せざるによる。三には目前の小利を弃ひ、名譽を廣めず、併せて已に得たる名譽も自損するによる』(第一編、六八頁)

ホ　企業の經營について

凡そ近代企業の中世的企業に異る重要なる特色の一つは、大なる資本を固定し、ために收支損益を相當長期に亙つて考量する要あり、從つてその經營が科學性・計畫性を要求する點にある。一行はこの點に深き內省を加へた。先づ起業については

『西洋人の事業を起す、其目論見を立るときに甚だ周密に思慮を盡して、事々詳愼なること、殆ど日本人と反對の性質なり。其成果あるべしとすれば、雛形・圖取をなす、演說を書立て、會社を募り、醵金を集む、此を著手の始めとす。是より免許をうけ、假木屋をたて、器械をすえ、兩三年の星霜も覺し、徐々と事業にかゝり進步を謀り、其事業と利益との計算により、益其場屋器械を堅美完全になして、榮譽を世に示すには少くも十年の功程を經ることなり。日本の人は、未だ利益を起すの實際に達せず、利益は容易に得らるべきものと思ひ、俄に目論見を起し、忽ち會社を設け、火急に事業を取

擴げ、一年ならざるに壯麗の場屋を建並べ、人目に眩耀する頃には其利益の實際は已に衰滅に徵せり。是人氣の活潑輕佻によると雖ども、實は未だ利益の眞理を解せざるに出る、此條の二三語を玩味して可なり』（第三編、二一一五—六頁）、

といひ、更に分業の進歩とこれを總括すべき圖面と雛形の重要なることゝを縷々說述せる後、我國在來の經營方法を顧みて、

『我邦の工事多く粗鹵なるは、其原則物理・化・重の學多び度學に嗜きによれども、畢竟は圖引雛形に精神を用ひ費用を擲つを欲せず、一念心に浮めば空によりて意想を回し、大略慮至れば直ぐ工業に下手し、成否を一擲に試み、成らずして家を傾るもの比々みな然り。工の進まざるは、蓋し此に本づく。學術の開けざるも亦此に本づく。曾て之を評す、歐洲の民は性質魯鈍なり、故に思慮周到して竟に動すべからざる業を成就す、日本の民は性質機敏なり、故に思慮を用ひるを厭ひ、竟に進歩を失へり。思はざるべからざるなり』（第二編、一四五頁）

と。要する企業に於ける科學性の缺如を指摘せるものに外ならない。

三

以上、經濟上の事項についての使節一行の內省を列擧したが、一行の觀察は更に國民の氣習にも及び、而もそれは富國强兵の立場から行はれた。一二これを同書より抽記するに、例へば某公園を見學して

『東西洋の風俗性情の每に相異なる、反對に出るが如し。西洋人は外交を樂む、東洋人は之を憚る。是鎖國の餘習のみにあらず。抑財產に用心薄く、貿易を不急にするによる。西洋人は外に出て盤遊を樂む、是一小邑も必公苑を修むる所なり。東洋人は室內にあり憊居するを樂む、故に家々に庭園を修む。是土地の肥瘠より生ずる氣習然るか。西洋人は有形の理學を勉む、東洋人は無形の理學に騖す。兩洋國民の貧富を異にしたるは、尤此結習より生ずるを覺ふなり』（第一編、五〇頁）

といひ、維納萬國博覽會を視察しては

『夫歐洲列國の大小相分るゝ英・佛・露・普・墺の大國あれば、又白・蘭・薩・瑞・土の小國あり。國民自主の生理に於ては、大も畏るに足らず、小も侮るべからず。英・佛兩國の如きはみな文明の旺なる所にて、工商輩秀れども、白耳義・瑞士の出品をみれば、民の自主を遂げ各良實を蘊蓄すること大國も感動せらる。普は大に薩（ザクセン）は小なるも、工藝に於ては相讓らず。而して露國の大なるも、此等の國とは猶其列を同くする能はず、墺國の列品をみれば、勉强して文明國に列するを得るにすぎず。是他なし、民に自主の精神乏き

によるなり。噫此等の競ひは、是太平の戰爭にて、開明の世に最も要務の事なれば、深く注意すべきものなり』(第五編、二頁)

と述べて、一國の富强に國民の自主的精神、換言すれば創意が如何に重要であるかを深く内省してゐる。

要するに米歐諸國を回覽して我國の實情を顧みたとき、一行の胸中に浮び上つた我國經濟發達の後れた狀態は實に著大であつた。農工業の近代化、貿易の促進、企業經營の合理化、科學的精神乃至は自主的精神の振起などあらゆる方面に及んで進步發達を圖り、以て我が後進性を脫却して外國資本主義に對抗しなければならぬことが痛感せられた。實に區々たる近代的生產技術の移植のみの問題ではなかつた。かくて、如何にして速かに富國强兵の實を擧げるかの問題の解決のために、產業・教育其他あらゆる方面に着目して、强烈なる殖產興業政策が行はれることになつたのである。